

『教行信証』

入門 — 浄土真宗の根本と学びの姿勢 —

石田慶和

教行信証入門―浄土真宗の根本と学びの姿勢―目次

第一部『教行信証』「総序」をめぐって

はじめに―『教行信証』を学ぶ理由……………	7
めぐみ―無明の闇を破す……………	23
まこと―宗教的要求……………	65
遇う―浄土教の伝統……………	91
おわりに―親鸞聖人の願い……………	115

第二部 浄土真宗の基本概念と教学的課題

はじめに―浄土真宗の根本テーマ……………	121
一、本願……………	127
二、名号……………	140
三、信心……………	157
四、称名……………	197
五、浄土……………	216
六、方便化身土……………	235
おわりに―教学の今日的課題……………	253
あとがき……………	262
刊行にあたって……………	268
初出一覧……………	269

嵩満也

*聖教の引用については、
『浄土真宗聖典(註釈版)第二版』は『註釈版聖典』
『浄土真宗聖典(七祖篇)註釈版』は『註釈版聖典(七祖篇)』
と略記しています。

第一部 『教行信証』 「総序」をめぐって

はじめに—『教行信証』を学ぶ理由

「領解文」の伝統

親鸞聖人(一一七三—一二六三)のご著書であり、浄土真宗本願寺派では「ご本典」と申していますが、私たち浄土真宗の門信徒が一番の依りどころとしております『教行信証』(『顕浄土真実教行証文類』)につきましても、お話をさせていただきたいと思えます。『教行信証』はなかなか難しい書物です。この機会に『教行信証』についてお話をしようと思いましたが、いくつか理由がありまして、そのことについてははじめに少しお話をし、それから本題に入っていきたいと思えます。

その理由の一つは、『教行信証』は親鸞聖人の一番中心となるご著作でありますから、聖人の教えを学ぶうとする者は、やはり僧俗を問わず、そして学問をして

いる者、していない者を問わず、『教行信証』を学ばなければならないと私は思います。

つい最近まで、浄土真宗の教えはわかりやすいようにと、皆さんよくご存じの蓮如上人（一四一五—一四九九）のお作りになったとされている「領解文」を中心に伝えられてまいりました。これはわかりやすい和語で書かれています。この中で教えられていますのは、「安心」と「報謝」と「師徳」、それから「法度」です。

もろもろの雑行雑修自力のころをふりすてて、一心に阿弥陀如来、われらが今度の一大事の後生、御たすけ候へとたのみまうして候ふ。

（『註釈版聖典』一一二七頁）

というのが安心で、安心とは信心のことです。安心がどういうものかということ、私たちの先輩の方たちは、この言葉に基づいて熱心に嘯んで砕いてお伝えに念仏につきましたして教えていただく。

たのむ一念のとき、往生一定御たすけ治定と存じ、このうへの称名は、御恩報謝と存じよろこびまうし候ふ。

（同頁）

これが報謝です。それから師徳というのは、こういう教えが伝わってまいりますには、それぞれの時代の善知識のお導きがなければ、私たちが教えに導かれることはできませんので、

この御ことわり聴聞申しわけ候ふこと、御開山聖人（親鸞）御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩と、ありがたく存じ候ふ。

（同頁）

とあります。それから最後が法度で、これは宗門としてのきまり、規則です。

このうへは定めおかせらるる御掟、一期をかぎりまもりまうすべく候ふ。

(同頁)

これが「安心」と「報謝」、それに「師徳」と「法度」です。お説教が終わりますと、門信徒の方々は、ご一緒にこの「領解文」を唱えて、浄土真宗の教えはこういうものだというのを学んできました。

近代化と『歎異抄』

しかし、この「領解文」の内容がだんだんわかりにくくなってきました。「もろもろの雑行雑修自力」といっても、雑行雑修自力とはどういうことかということですが、昔は一般の人たちの理解の中になりましたから、それでいたい話が通じて

いました。本願寺派の僧侶を養成する専門学校として中央仏教学院がありますが、そこで伝道の勉強をしている若い人たちは、いまでも「領解文」について習います。けれども、それがだんだんわかりにくくなってきていると私は思います。また「定めおかせらるる御掟」といっても、そのようなものは教団が決めた規則ではないか、というような批判も出てまいります。

そうすると、教え方が少し変わってきていると言いますか、親鸞聖人の教えはそんな枠にはまったものではなくて、もっと生き生きしたものだから、聖人の直接の言葉からわかるのではないか。そのような親鸞聖人の肉声聞けるのは『歎異抄』ではないかということから、『歎異抄』に学ぼうという主張が出てきます。

親鸞聖人の教えの中での『歎異抄』の大きな位置を明らかにされた方は、明治六三―一九〇三)です。現在でも真宗大谷派の先生方のいわば心の中心にあるような方で、もう亡くなられましたが、曾我量深先生(一八七五―一九七一)とか金